早稲田大学図書館所蔵

『五十番歌合』解題と翻刻

御手洗靖大
兼築信行

【序言】

早稲田大学図書館に新たに収蔵された『五十番歌合』（ヘ四-八二一三）に解題を付し、翻刻する。当該本は十市遠忠（一四九六～一五四五）の自筆本（自筆自作品）である（以下、新収本と称呼する）。

遠忠は室町時代後期（戦国時代）の歌人である。十市氏は春日大社や興福寺と密接な関係を保ち、大和平野の東部を拠点とした。大和の国人としての十市氏の出自は、実はよく分かっていない。十世紀後半に十市宿禰有有象が中原姓を賜り、中原を称したといい、遠忠も「中原遠忠」と自署している。しかし、有象と遠忠の関係は不詳と言わざるをえない。[1] なお遠忠は十市氏の惣領となっている。戦国武将たる遠忠であるが、二十七歳から、四十九歳で没するまで、旺盛な和歌活動を行った。玄誉や徳大寺実淳に師事、後に富小路資直・三条西実隆・三条西公条などに歌合の判や合点を求め、都の歌壇と深い関わりを持った。自身も歌会や歌合を催し、数多の自歌合が伝存している。既に早稲田大学図書館には、自筆本として『三十番歌合』（ヘ四-八〇六九）と『太神宮法楽百首』（ヘ四-八一〇七）が所蔵されて

いるが、当該新収本もまた自筆の自歌合であって、本学図書館の遠忠自筆本コレクションは都合三点となった。これは、前田育徳会尊経閣文庫に次ぐ点数である。また、遠忠は多くの歌集・歌書を書写しており、稀本や善本として扱われていることも特筆しておきたい[2]。本学図書館も遠忠筆の『草菴和歌集』（へ四－八二〇二）を蔵する。

遠忠の自筆自歌合たる当該本は、遠忠研究のみならず、広く室町期の和歌・典籍研究に寄与しうる貴重な資料である。遠忠の和歌活動と書写活動については、井上宗雄と武井和人に詳細な研究がある[3]。

【解題】

遠忠の『五十番歌合』はいくつか知られているが、当該本は享禄年間（一五二八年～一五三一年）の冬に結番された自歌合である。これまで、尊経閣文庫蔵『五十番歌合』（以下、尊経閣本）によってのみ知られていた。尊経閣本は五つの歌合を合写する取り合わせ本であり、当該歌合は五番目の「五十番歌合」に当たる[4]。そして「此一冊者予稽古初所詠也。仍年経而後見之処、荒涼事等旁片腹痛之間、投火中思立」と記し、これらの歌合は歌作の初期に行われたものであって、尊経閣本は後年それを纏めたものと考えられる。その当該歌合の識語は、次のように記されている。

此歌合者、左（者）半日大永八年春詠之。右為聖廟法楽同七年八月廿五日一日詠之。然享禄冬、書番為指南資直判詞、所望一巻書寫之次、右哥御点、徳大寺相国入道殿

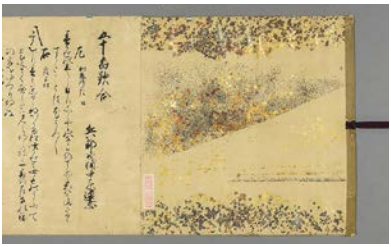
左方歌は大永七年（一五二七）八月二五日に北野社法楽として詠まれた一日五十首詠、右方歌は同八年（一五二八）春に詠まれた半日五十首詠という。これらを享禄年間（一五二八～一五三二）[5]の冬に結番し、判を富小路資直に、点を徳大寺実淳に依頼したとある。左方歌の一部は、『新編私家集大成』「遠忠Ⅰ」の詠草（二二〇～二二八）に「聖廟法楽五十首和歌」として収載されている。

判者の富小路資直は大永六年（一五二六）従三位。長らく六位に留まっていたが、五位の昇殿に際しては殿上人の反対署名もあったという。九条家や三条西家で重用された公家歌人であった。生年は未詳だが、天文四年（一五三五）に没している。したがって享禄年間は、資直の晩年となるが、遠忠とはその頃に関係があったらしい。苦労人であったせいか面倒見がよく、当該歌合以外にも、『五十番歌合（享禄三年春）』、『五十番歌合（享禄四年二月）』の判者もつとめている。[6]

徳大寺実淳（一一四五～一五三三）は和歌を好んだ清華の歌人。三条西実隆らとの交流が知られる。永正六年（一五〇九）に太政大臣、同八年出家、天文二年（一五三三）没。晩年は、息男の空実が興福寺の子院（喜多院）に入っていたため、奈良に滞在することが多かった。遠忠がはじめに関係を持った公家は実淳であったと考えられている。[7]

【書誌】

新収本の書誌は以下の通り。巻子本一軸。表紙は花紋の緞子で、縦二五・五糎、幅二五・〇糎、外題は無い。見返しは金銀切箔砂子散らし。料紙は斐楮交漉紙、墨付一五紙を継ぐ。一紙は約二九糎ほど（第一紙は三一・六糎、第一五紙は二七・八糎）。桐箱に収める。内題「五十番歌合」。一首一行書き、歌の字高は二二・五糎[8]、一紙一〇行。和歌には合点を付す。詞書と同じ高さに判詞を記す。武井和人はこれを「評語」としている。[9] 和歌・判詞ともに同



早稲田大学図書館所蔵『五十番歌合』解題と翻刻

筆。「右」や「な」など、遠忠に特有の字体が確認できる。右筆の存在も指摘されてはいるが、遠忠自筆と認定する。

第五紙と第六紙の継ぎ目と、第一一紙と第一二紙の継ぎ目の、それぞれ線対称の位置に虫損が存し、修補が施されている。また、第四紙と第五紙の継ぎ目と、第一二紙と第一三紙の継ぎ目が、それぞれ合点の一部と重なっている。さらに折り目跡と思われる箇所が確認できるので、袋綴本からの改装である可能性が高いことを指摘しておく。

尊経閣本では資直の判詞が歌句に傍記される形をとるが、新収本は判詞の形に記されている。判詞も含め一筆と認められる。推敲の結果併記された補記[10]が存し、自筆の浄書手控え本かと考えられる。

なお武井和人氏より多大な教示を得た。また書誌については、瀧山嵐氏から教示を得た点がある。本稿は御手洗靖大が執筆し、兼築信行が校閲した。

注

（1）朝倉弘『奈良県史　第一一巻　大和武士』（一九九三年、名著出版）参照。

（2）例えば、宗良親王（後醍醐天皇皇子）の『李花和歌集』があげられる。

（3）井上宗雄「十市遠忠について」（『言語と文芸』五〇、一九六七年一月）、同『中世歌壇の研究　室町後期』改訂新版（一九八七年、明治書院）、武井和人『十市遠忠和歌典籍の研究　研究篇』（二〇二〇年、武蔵野書院）参照。

（4）尊経閣本については、以下を参照されたい。井上宗雄「十市遠忠三十番歌合について」（『早稲田大学図書館紀要』四四、一九九七年三月）、武井和人（研究代表者）『中世後期南都蒐蔵古典籍の復元的研究』（平成一五年度～平成一七年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書、二〇〇六年三月）、武井和人「遠忠歌合・自歌合解題稿」（『十市遠忠和歌典籍の研究　研究篇』二〇二〇年、武蔵野書院）。

（5）武井「遠忠歌合・自歌合解題稿」は享禄元年かとする（二七九頁）。

（6）井上『中世歌壇史の研究　室町後期』（二六〇頁）参照。

（7）井上『中世歌壇史の研究　室町後期』（三〇五、三〇九頁）参照。
（8）字高について、拙稿（「〈新収資料紹介〉『五十番歌合』（十市遠忠五十番自歌合〈享禄某年冬〉」『ふみくら』一〇二、二〇二二年一〇月）では誤記があった。このように訂正する。
（9）武井「遠忠歌合・自歌合解題稿」。
（10）武井「重層をなす自筆本（一）―『住吉法楽百首』攷―」（『十市遠忠和歌典籍の研究　研究編』二〇二〇年武蔵野書院）など参照。

【翻刻】

〔凡例〕

一、底本の改行等そのままとする。
一、漢字は原則として通用の字体とする。
一、和歌の下の括弧内に通し歌番号を付す。
一、欠損による判読不能文字は□とする。
一、歌題と勝負付は「左」「右」の右下にやや小さく記されるが、翻字では同じ大きさとする。それ以外の小字は〈　〉に括る。
一、判詞は「左」「右」とほぼ同じ高さから記されるが、歌頭二字下げに統一する。なお39番歌に続く判詞「珍重也」のみ第三句の左に小書きされるが、尊経本も同断である。
※　画像は、早稲田大学「古典籍総合データベース」に公開されている。

〔本文〕

五十番歌合

兵部少補中原遠忠

左　初春待花　勝

春かせの立にし日よりしら雲のなかめのすゑに花そまたるゝ（1）

すかたことは尤よろし

右　霞間松

〈かすむより春とはしるし朝ほらけ松吹かせも世ものこかにて（2）

是又まくへしとは見え侍らねと一番の左なれは勝

の字をゆつり侍ぬ

左　山路尋花　勝

行くらし山ち夜深き月にねて明なは猶や花をたつねん（3）

右　朝夕鶯

うくひすのこゑもしつけき世に出て朝夕春のなかめとそなる（4）

結句おもひたきにや

左　山花未遍　持

よそめには皆さく木々ときてみれはおくは雲なる山のはの花（5）

右　梅紅白

むめの花しろきか中に紅をうへませてこそ春も色〳〵（6）

左　朝見花　持

露をきて消ぬまをのみみる花のはなにな吹そ春の朝風（7）」第一紙

右　堤辺柳

青柳のいとよりかけて吹かせの一すちなかき春のつゝみに（8）

両首ともに心ゆるすこそ見□ふれ

左　遠村花　持

春の日に霞乱てさく花のむら〳〵見ゆる春の遠さと（9）

春の日にかすみ乱へきことはりきこえす又春のとを

さとゝいひはてたるもきゝにくし

右　浦春月

〳〵をよはしや春は絵島に執筆もうらをふかめてかすむよの月（10）

左　故郷花

花さけはむかしにかへる志賀の里人こそこそり春の一剋（11）

右　惜花経年

〳〵年へぬる花もりいかにこと（の山歌）ゝはむむかしはちらぬ春のもありやと（12）

左　田家花

山里の田つらにたてるさくら花おなし色なる鴉のこかれ羽（13）

此鳥不得才覚候上惣而風体如何

右　花処々　勝

さくら花いまや先みむ冬草のはつかにさけるところ〳〵を（14）

左　古寺花

あすかてら花はむかしの色香にていらかくつるゝ春雨そふる（15）」第二紙

第四句みむろの岸なといへるやうには聞えさる歟

右　菫染袖

〈我袖もそむるはかりにひくまのゝすみれつむとて春そきにける（16）

第五句こゝろえかたし

左　花似雪

花さかりさなから雪のみよしのに冬こもるらむ春の里人（17）

右　渓款冬

〈谷ふかみ人もとはしと口なしの色にや花の世をはうらむる（18）

左　河辺花　持

花のなみ立こそかくせ桜さくふる川のへの杉のこすゑを（19）

右　暮春山

〈春の日のしつかにくるゝ山かけをたのしむ人や分てみるらん（20）

左　深山花　勝

尋ねきてみる人あらしあし引の忍ふの山のおくにさく花（21）

右　岡新樹

紅葉より染こそまされかたをかのあゆよりもこく茂る梢は（22）

左　暮山花

つれなしやなかき春日の暮をもしらすかほなる花の雨かけ（23）

右　海辺郭公　勝

〈わくらはにとへるつてかも時鳥須磨のうらはの夜半の一声（24）」第三紙

左　古渓花　持

谷の戸の花をあるしにすみか□□かつらき山の春の山伏（25）

第三句耳とをき心ちし侍り

右　閑居夏月

さひしさを忘むとすれは短夜にむかふ月さへいたくかたふく（26）

閑居のこゝろかすかなる歟

左　関路花　持

みとりたつ関の杉むらかすむなり相坂山の花やさくらん（27）

五文字其詮未二きこえす

右　川夕立

〈夕立にたちやすらへは谷川をわたらぬほとに水まさりきて（28）

早稲田大学
図書館所蔵『五十番歌合』解題と翻刻

ことはりはきこえ侍れとかつまては如何

左　羇中花　勝

たひ衣しほりはてゝも花みつゝ山ちにくらす春はうからす（29）

よろしきゝ似たり

右　松下水

松かせを手にむすはねと涼しさに岩まのし水しはし忘れつ（30）

左　湖上花　持

から崎の松こそなけれみる花のたくゐなき色によするさゝ波（31）

右　浜早秋

」第四紙

〈今日よりは秋のなかめもありそ海の浜の真砂のつきせぬうらかせ（32）

両首こゝろゆかぬにや

左　橋下花　持

あやうさをみつゝ忘て信のちや木曽のかけはし花に行きて（33）

て文字さしあひきこゆ行きゝていへるもいかゝ

右　朝草花

朝あけの花の露みむ秋の野にふりな落しそすゝむしのこゑ（34）

第四句心えす朝あけも沙汰ある歟

左　花下送日　持

花みつつ日数つもりてかへらねはむくらにとつる宿と成らん（35）

花みる日かすのほとにむくらにとつるまてのことは

ありかたくや

右　連夜翫月

夜をかさねいつかはあかむ久かたの月をはひるもわかてみまほし（36）

下句平懐にきこゆ

〈左　庭前落花　持〉

桜花又さかりをもみつるかなちりしく庭をはらふ山かせ（37）

いひおほせす

右　観月傷老

〈見るまゝに月にうかれてたつか弓引かへされぬ老のすかたを（38）

たつか弓さしたる所用なきか

左　暮春惜花　勝

さらてたにおしくやはあらぬ花のかけを春もくれ行夕暮の空（39）

〈珍重也〉

右　雁迷雲霧

秋きりに立まかひきて天津かりつはさにわけし八重のしら雲（40）

左　初秋月　勝

」第五紙

夕月夜あさちか露にうつりきてまた影うすき初秋の空（41）

尤よろしと申へし

右　鹿声近

都にて聞しは遠きしかのねを軒はになるゝ秋の山さと（42）

左　月前草花

きてみれは月も千くさの花のえに色〳〵にのみうつる秋の野（43）

右　擣衣幽　勝

〈秋風にやゝはたさむくうつ衣をともま遠にさ夜深にけり（44）

にもしかしかましくきこゆれと歌から

よろしきにや

左　雨後月　勝

晴にけり今こそ月を猶そみむ雲もちりなきむら雨の後（45）

ちりも雲なきとあるへき歟

右　岡紅葉

露時雨いつくはあれともみちはを先をかへよりそめやそむらん（46）」第六紙

先をかへより染へきことはりきこえす

左　□間月　勝

照まさる今夜の月にみつる哉松の下葉もかそふはかりに（47）

右　名所菊

〈ところから折から秋のしら菊の吹あけられて匂ふ浜かせ（48）

下句頗可謂異風者哉

〈左　山家月　勝〉

しはしまてそれを友なる柴の戸にとをさかり行山のはの月（49）

右　秋時雨

神無月またてしくるゝ長月の有明かたの山のはの雲（50）

同字あり

左　月前竹風

よゝをへてふしみの呉竹にかけなひき行秋かせの末（51）

右　落葉混雨　勝

木葉ちるまやのあまりにさ夜更てよそにはきかぬ冬の雨哉（52）

左　野経月　持

武蔵野やお花の波にうきしつみ夜わたる月のはてもしられす（53）

右　山寒月

しら雪に山はかゝみをかけそへてみかくもさゆる冬の夜の月（54）

左　沢辺月　持

影うつす野沢の水にふす鴫のつはさにかくは秋の夜の月（55）　」第七紙

早稲田大学図書館所蔵『五十番歌合』解題と翻刻

第四句きゝにくき歟又水中にふしたる様に
きこゆる歟此鳥をしかもの類にはあらす
右　川千鳥
〈千とりなく河かせさえてさむき夜は声にも霜やをきまさるらん（56）
こゑに霜をくへきこと如何
左　月前聞雁
又やみん又やはきかむ秋かせにかりかねわたる有明の空（57）
又やみん又や見さらむしら露の玉をきしける
秋はきの花此哥をとれるとは見え侍らねはなを
可有斟酌歟
右　篠上霰　勝
〈朝な〳〵さゝ分し人は袖絶（袖影歟）えてあられにさやくをとそ聞ゆる（58）
さやくあられのとあるへき歟
左　浦辺月
淡路かた御鉾の露のうら風にこりかたまりて月もみゆらむ（59）
全篇不庶幾歟
右　夜仏名
〈となふれは三世の仏の名を分てちかひそ深き雪の山てら（60）

第三句心得かたし結句もつまりてきこゆ

左　月照滝水

音羽山木のまをちくる秋のよの月かけむすへ滝のしらいと（61）

右　言出恋

〈しらいとのしらすかほなる人に我たゝすことはのなとかたるらむ（62）

左　杜間月

行そみむ生田のもりの月のかけさえても秋のけしきことなる（63）

右　互忍久恋

もろともに月はもりきてやとれとも久しや忍ふしける板まは（64）

左第一句右第四句短慮不弁

左　月前秋風　勝

秋風のその色としはなけれとも深行月にひかりそへつゝ（65）

右　毎夕恋

待よひのつもるか中のいもせ川夕や恋の淵となるらむ（66）

左　江上月　持

住の江や神さひわたる秋のよの月にいくたひ（は、歟）松風のふく（67）

右　夢中逢恋

恨すな君にも見えは夢にても契し夜半はうつゝならすと（68）

」第八紙

左は姿詞よろしくく右はその心ふかし

左　月前虫　持

きり〳〵す霜よを月にうれへきて軒はの草によたゝなくなり（69）

よたゝこひねかふへからす

右　契後世恋

〳〵後の世と契りても又いかならむ人の心はつねならぬ物を（70）

結句なかくきこゆ一字といへともいかゝ

左　月前聞鹿

さをしかのつま恋すてふ山のはにまたれて出る秋の夜の月（71）

右　放返書恋　勝

かきやりし此ことのはを返しても思ふ心はせく道やなき（72）

左　旅泊月

清見かたたゆたふ浪のかち枕月をしるへのとまりとそみる（73）

右　白地恋

〳〵馮みきてなか〳〵今はくやしきやあからさまなる人のことのは（74）

左　月前草露　持

尋きて草のいほりの床の露たひねの月に秋かせそふく（75）

平等の病常の歌合の例にまかせて難と申へし

」第九紙

右　忘住所恋

我身こそ忘られぬともせめて人すみこしさとゝ尋てもゆけ（76）

其心たしかならす

左　菊籬月　持

仙人のまかきの菊にひかれきてうちはらふ袖に有明の月（77）

右　欲絶恋

うつろはむとおもふも人の花心絶なはたえよ春の山かせ（78）

左　暮秋暁月

秋もはやくれ行空は有明の月の影さへ見えてすくなき（79）

右　恨身恋　勝

いかにせむ身は数ならす大かたの情ある世を人も忘れし（80）

左　寄雲恋　勝

恋しやと思ふ心は絶もせてたえ行雲に松かせのこゑ（81）

右　山樹高低

〈玉椿ふりさけみれはさし出る八峯にたかくみかく日のかけ（82）

玉椿ふりさけみむ事天の原には相違すへき歟

八峯の日影もみかさの山の月に及かたき歟

左　寄風恋　勝

」第一〇紙

吹かせのたよりにつけて恋しさをいひやる道のあるよともかな（83）

右　浜楸

白妙に月はてらねと楸生ふる浜のま砂に霜そかさなる（84）

左　寄雨恋

君をのみおもふ心はをやみなくふる春雨のかすならぬ身に（85）

右　水郷眺望　勝

〈難波かた朝きり晴てなかむれは明石のうらを出るつり舟（86）

左　寄草恋　持

つれなさは皆かれ（霜）のおり〳〵も人の心にしける道しは（87）

五文字いともこゝろえられす

右　隣家鶏

子をおもふ笛のねならぬ庭鳥にあなかま夜半の隣かへてん（88）

左　寄木恋　持

いさゝらはえにしもとめてうへそみむ君かやとには松としらねは（89）

右　渕魚

住魚よそこゐもしらぬ淵にても人の心にこゝろゆるすな（90）

左　寄鳥恋　持

一ことも我をおもふと人いはゝ花鳥の音はさもあらはあれ（91）

」第一一紙

右　瀬亀

やまと哥のなかれもこゝにみなせ川苔むすかめにむかしとはゝや（92）

左　寄嵐恋

今までは残さし物を夕あらしあらしことはのをはつせの山（93）

愚意不分別

右　山家煙　勝

山里の朝けのけふりたきすてゝうしろのはたをかへすますらお（94）

左　寄舟恋　勝

尋かね舟の中にはとしふとも逢てふ恋の道もあらしな（95）

右　旅友多

〈故郷のことのみかたる大伴のみつともしらぬ松の木かけに（96）

左　寄琴恋　持

かはり行恋路にたつるつまことの引かへすへきこゝろならねは（97）

たつると侍るおほつかなし

右　述懐涙

此神の心つくしのなみたよりちかひの海もふかく成らん（98）

百千行さもこそ侍らめいかさまにもこゝろゆかぬ

風体にや

」第一二紙

左　寄衣恋

夏衣しのにそいのる河社ちきりはうすき一重なりとも（99）

右　社頭祝

時いたる北野の宮をわか君のおほむめくみにみかきつくらん（100）

（一行分空白）

左哥川社の事ふるくより沙汰ある事なれは
ことあたらしく申にをよはす夏衣によせて
うすき契なりともとこひねかはれたる心はあらはれ
侍るを一重なりともといへるわたりおもひたきにや河
やしろもしゐて詮なくや右歌御と云字はみとよ
める外は近来の哥にことに見及侍らぬこゝちし
侍るうへこの比の哥さまには不相応にやとそ見た
まふるなすらへて持とそ申侍る
抑自歌を番て雌雄を論する事は吉水僧正七社
哥合西行法師御裳濯宮川両度之哥合
なとはしめとも申へきにや判者はいつれも
五条三品京極黄門氷詞雹語をちりはめられた
りある人此一まきに勝負の字をつくへきよし

」第一三紙

命あり先蹤をあらためす神慮にことをよせ
て北野宮法楽のためとかや侍れはいなひかたき
もさることにて其器にあらすと申さんもかへり
てをこかましくも成ぬへけれはたゝ枉て人□に
したかふことはかりをよりところにて忽然念起の一
はしをのへ侍り難波江のよしあしはたかはぬ
ふしもあらしなれと胸襟の表裏なきところは
いかてか真鑑なからむや添削の詞ことさらはゝか
りおもふたまふれと此作者数寄深切にして浜千
鳥のことゝふ跡たひかさなり侍れはあひたかひに
稽古のためこゝろをのこすましきよし契約し
侍るによりてしるしつけ侍になんあな
かしこ〳〵

」第一四紙

（一行分空白）

左者半日詠右者〇聖廟法楽御点者徳大寺
相国入道殿判詞者資直卿

【本文異同】

〔凡例〕

一、「尊経閣文庫蔵『五十番歌合』〔五四・什上〕合写本」との異同を示す。

一、新収本（歌番号）―尊経閣本の形で対応させる。

一、尊経閣本は、武井和人『十市遠忠和歌典籍の研究　資料篇下』（二〇二〇年、武蔵野書院）の翻刻に拠るが、通用字体に改めた。国文学研究資料館蔵マイクロフィルムを確認し、翻刻に訂正が必要な場合は「　」で示す。翻刻の訂正に当たっては、武井氏より教示を得た。

〔異同〕

・見□ふれ（8　判詞）―見えふれ

・才覚（13　判詞）―才学

・はつかにさける（14）―いつかにさける「はつかにさける」

・むろの岸（15　判詞）―むろの岸や

・判詞ナシ（22）―同字あり

・うらは（24）―浦わ

・すみか□□（25）―すみかくる

・よろしき、（29　判詞）―よろしきに

・木曽（33）―木暮

・かけはし（33）―かけは

・□間月（47）―松間月
・野経月（53）―野径月
・声にも霜や（56）―声にし霜や「声にも霜や」
・篠上霰（58）―篠上霰秋「篠上霰」
・けしきことなる（63）―けしきとなる「けしきことなる」
・人の心は（70）―人の心や「人の心は」
・難と申へし（75）―難と申へく
・こゝろゆるすな（90）―心ゆするな「心ゆるすな」
・時いたる（100）―時いたり

（みたらい　やすひろ　文学研究科博士後期課程）
（かねちく　のぶゆき　文学学術院教授）